

野鳥から 見えてくる日本の島々の重要性

日本野鳥の会 山本 裕／小林 豊

亜寒帯から亜熱帯にかけて細長く展開する日本列島には、じつに多様な生物が共存し、野鳥の世界からもその一面を垣間見ることができ、キーワードとなるのが島だ。日本固有の野鳥は一九種、そのうち、一一種が島に生息している。一方で、絶滅した野鳥は二三種、うち二種は島に生息していたという。共に生きる環境を保全し、活かしていく道筋を探るためにも島の存在は重要性を増している。

はじめに

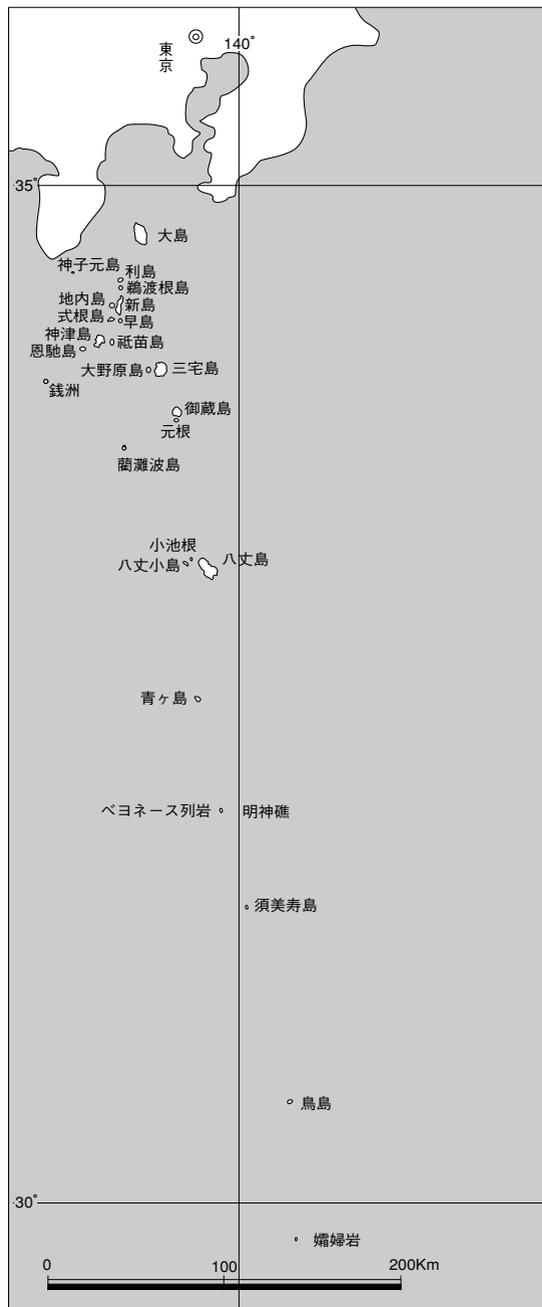
二〇一〇年一〇月、愛知県名古屋市で生物多様性条約第一〇回締約国会議が開かれたのは記憶に新しいところです。この会議の報道で「生物多様性」という言葉を初めて耳にした方もいらっしゃるでしょう。生物多様性は温暖化と並んで地球の環境変化を表す二大キーワードになっています。そして生物多様性を語る上で大きなキーワードが、「島」

なのです。今回はいま話題の生物多様性の観点に立って、野鳥と東京都の伊豆諸島を題材に、島の価値の再発見を試みたいと思います。

火山島が一〇〇以上連なる伊豆諸島

伊豆諸島は、東京の南方約一二〇キロメートルに位置する大島を北端に、南端の孀婦岩むすめいしわまで南北約五六〇キロメートルにわたり連なっています。有人島は大島、利島、新島、

図1 伊豆諸島の島々



式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島の九島。このほか、昔は人が住んでいた鵜渡根島や八丈小島、鳥島と多数の無人島があり、島数は一〇〇あまりと言われています(図1)。

いずれも火山島で、有史以来噴火のない島もありますが、活発に噴火を続ける島もあります。近年では二〇〇〇年に三宅島が噴火し、およそ五年もの間、全住民が避難離島の

生活を余儀なくされました。噴火から一〇年が経過しましたが、いまだに火山ガスの噴出が続いており、立ち入り禁止や居住制限の区域がいまも設定されています。

一方で黒潮がもたらす温暖多雨な気候は、豊かな森も育んでいます。溶岩原から巨樹の森まで、火山島が何万年もかけて変化する姿を一度に見られるのは、伊豆諸島の特徴といえるでしょう。

島が高める生物多様性

二〇〇五年、世界の「生物多様性ホットスポット」三四ヶ所が発表されました（註1）。その中には日本も含まれていて、日本の生物多様性の高さが国際的にも認められたのです。日本の生物多様性が高い理由の一つは、日本列島が北緯二〇度の亜寒帯から四五度の亜熱帯にかけて、長く連なっているからです。寒い地域と暑い地域、それぞれの多

様な環境の中に生息する動植物がいるため、生物相がとても豊かになっています。

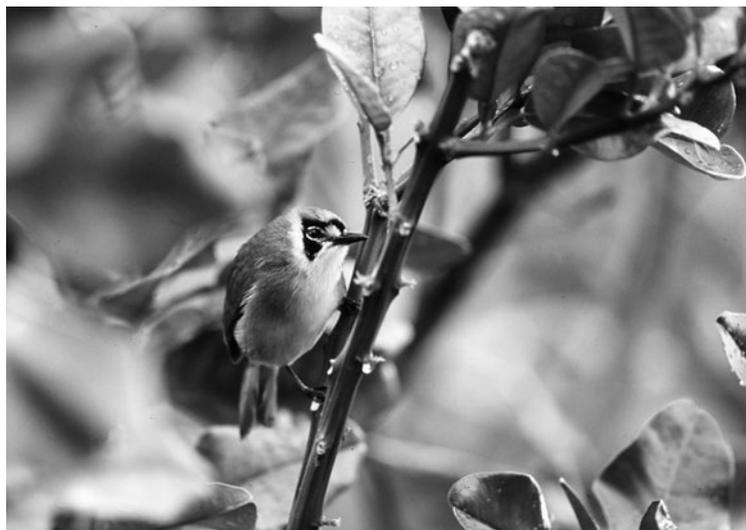
もう一つの大きな要素が「島」です。日本列島は、無人島を含めると大小六八五二もの島から成り立っています。大陸から隔絶された島では、独特な生物種が進化します。よく知られた例では、ガラパゴス諸島にすむトカゲの仲間のイグアナや小鳥のダーウインフィンチの進化があります。イギリスの博物学者ダーウインがこれらの動物を研究し、進化論に至ったことは有名な話です。「島」は進化の実験

表1 日本固有種の鳥類

| 種名 | 北海道、本州、 四国、九州を除く 島嶼で見られる鳥 |
|-----------|---------------------------------|
| アホウドリ | ○ |
| クロウミツバメ | ○ |
| ミゾゴイ | |
| ヤマドリ | |
| ヤンバルクイナ | ○ |
| アマミヤマシギ | ○ |
| オオジシギ | |
| カンムリウミスズメ | ○ |
| アオゲラ | |
| ノグチゲラ | ○ |
| セグロセキレイ | |
| カヤクグリ | |
| コマドリ | |
| アカヒゲ | ○ |
| アカコッコ | ○ |
| イジマムシクイ | ○ |
| メグロ | ○ |
| ノジコ | |
| ルリカケス | ○ |

表2 本州と伊豆諸島の
鳥類の亜種の比較

| 本州 | 伊豆諸島 |
|-------|----------------------|
| メジロ | シチトウメジロ |
| ヤマガラ | ナミエヤマガラ オーストンヤマガラ |
| ミソサザイ | モスケミソサザイ |
| コマドリ | タネコマドリ |
| コゲラ | ミヤケコゲラ |



場でもあるのです。

ガラパゴス諸島ほどではないにしろ、この島での進化を日本でも見ることができます。世界の野鳥は約九〇〇〇種、日本の野鳥は五四二種ですが、このうち日本だけに暮らす固有の野鳥が一九種います(表1)。これらの固有種が、日本列島で独自に進化してきたものです。

日本固有の野鳥のうち、北海道、本州、四国、九州を除いた島々(以下、単に島とします)にだけ生息するものは一種で、全体の半分以上を占めます。面積比からすると、いかに島での固有種の比率が高いかご理解いただけるでしょう。これらの島固有の野鳥は、まさに島の環境に依存して進化した動物です。

—— いまも続く進化が見える

伊豆諸島ではどの島も本州などと陸続きになったことはないため、一部の島にネズミやヘビがいますが、キツネやウサギなどの獣やカエルなどの両生類が本来いません。植物の種類も限られたものになっています。

野鳥は、日本の半数を超える約二八〇種が観察され、三八種の陸鳥と九種の海鳥が繁殖しています。伊豆諸島にすむ日本固有の野鳥はアカコッコ、イイジママシクイ、カンムリウミスズメ、アホウドリの四種です(表1)。このほか

に羽色や体の大きさが本州と異なり、別亜種になっている固有亜種が六亜種います(表2)。

前述しましたが、鳥は進化の実験場であり、いままさに進化が進みつつある野鳥もいます。本州にはヤマガラという小鳥がいますが、伊豆半島から約四〇キロメートルの新島と神津島には固有亜種のナミエヤマガラがいます。さらに南へ三〇キロメートルから一二〇キロメートルほど離れた三宅島、御蔵島、八丈島にはオーストンヤマガラという固有亜種がすんでいます。体は本州ヤマガラ、ナミエヤマガラ、オーストンヤマガラの順に、南の亜種ほど大きくなります。また羽色は南のオーストンヤマガラが濃く、本州ヤマガラでは薄いのですが、ナミエヤマガラは濃い色から淡い色までさまざまなものがいて、進化がいままさに進んでいる状況といえます。

—— 島の環境は代替不可能

島での進化を特徴付ける要素に、種間の競争が少ないことと捕食者がいないことがあります。島の面積は小さいですし、陸地から遠いと動物もなかなか移りすめません。そのため、島で暮らす動物の種類は限られたものになり、近い種同士の競争が起こりにくくなります。

沖縄本島に固有の野鳥ヤンバルクイナは、あまり飛ぶこ



島で特殊な進化をへてほとんど飛べない固有種ヤンバルクイナ。(撮影：戸塚 学)

とができません。天敵や競争相手が少ない島では、逃げたり急いで餌を探す能力を発達させなくても暮らしていけます。飛べなくなるのは退化するように思いがちですが、必要のないのに飛び回るのは無駄なことです。必要がないから飛ばなくなるのは、とても合理的な進化なのです。もしそういう島に天敵や強力な競争相手がやってきたら、逃げることを忘れた固有種はひとたまりもありません。

島の独自性を支える要因は植物にも見られます。陸地から遠ければ、動物同様、植物も移りすむ機会は限られます。無事に定着した植物の一部は、限られた環境の中で独自の進化をし、そこにすむ動物とともに唯一無二の生態系を形成します。

日本でこれまでに絶滅した野鳥は一三種類（亜種含む）ですが、じつにそのうち一二種類が島だけに生息していました。島の動植物とそれらが構成する環境は、とても脆弱で代えがたいものなのです。

——身近な動物が姿を消している

三宅島では、ここ二〇〇三〇年前にはたくさんいたのに、いまではほとんど見ることでできない動物が何種類かあります。オカダトカゲは伊豆半島と伊豆諸島の固有種で、足の踏み場もないほどというのは大げさですが、そう思える

ほどたくさんいました。それらがある時から、ほとんど姿が見られなくなりました。

農産物を食害するネズミの駆除を目的にイタチが人為的に導入され、トカゲをどんどん食べてしまったのです。そして、そのトカゲを餌にしていたタカの仲間、サシバもたくさん繁殖していたのですが、いまではいなくなりました。海鳥のオオミズナギドリも三宅島でたくさん繁殖していましたが、これもいなくなりました。ミゾゴイ（絶滅危惧種）やヤマシギといった野鳥もいなくなり、村の鳥で国の天然記念物の固有種アカコッコも少なくなりました。これらはイタチに食べられてしまったためと考えられています。

——島は海鳥のゆりかご

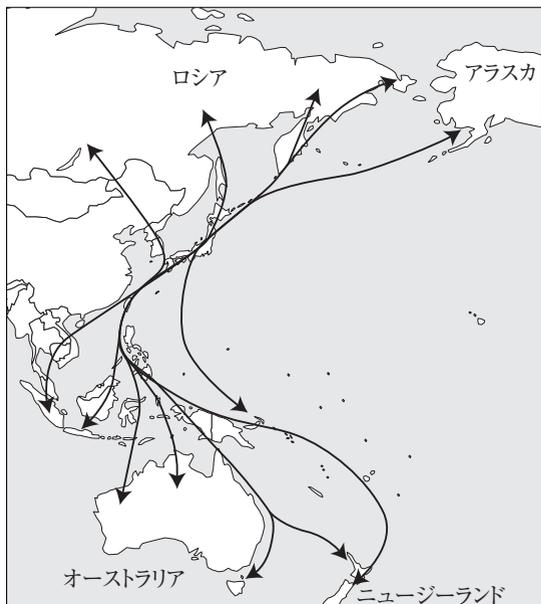
アホウドリは翼を上げると二メートルを超える大型の海鳥です。長い翼はわずかな風も確実に捉え、ほとんどエネルギーを使わずに飛び続けられます。塩分を排出する器官が発達しているので、真水を飲む必要はまったくありません。防水性の羽毛と水かきのある足を持ち、泳ぐことは得意で、海洋環境にうまく適応しています。餌はイカや小魚などで、海洋の食物連鎖の一角を構成しています。

一生を大海原で暮らせるアホウドリですが、産卵と子育てだけは陸地が必要です。しかし大きな翼では、一旦着地

図2 日本のIBA (重要野鳥生息地) における海鳥の生息地



図3 日本を通過する渡り鳥の主な経路



すると簡単に飛び上がられません。泳ぐための足も走り回るには不向きです。陸地で外敵に襲われたら、逃げられませんが、このような海鳥類は、島の中でも、とくに外敵の少ない小離島で繁殖します。

日本近海の小離島などだけで繁殖する海鳥類は、アホウドリをはじめ三八種類です。このうち二二種類（五七・九バーセント）は絶滅のおそれがあります。これら海鳥類の滅

少は繁殖する小離島の環境や海洋の食物連鎖の変化を示している、それは水産資源の変化などとして私たち人類の生活にも影響してくるものでしょう。

さらに、世界共通の基準で選定された野鳥の重要な生息地IBA (Important Bird Areas) (註2) は、日本に一六七ヶ所ありますが、このうち海鳥が対象で選定された島は三七ヶ所（二二・二パーセント）にもなりません(図2)。

また、忘れてはならないのが、島の渡り鳥の中継地としての役割です。南北に連なる日本列島と周辺の小さな島では、毎年春秋に、長距離の渡りを行なうシギ・チドリの仲間や小鳥類、タカ類などが数多く通過していき、休息やエネルギー補給の場となっています(図3)。

——さらに高まる島の重要性

海鳥のカムリウミスズメは全長約二四センチメートルで、その名のとおり頭部に冠羽があります。世界でも日本の近海にだけ生息する絶滅危惧種で、国の天然記念物でもあります。人や他の動物が近づきにくい小離島や岩礁が繁殖地で、伊豆諸島では神津島の属島・祇苗島（ただなえしま）や三宅島の属島・大野原島など九ヶ所です。三月下旬ごろに産卵し、雌雄交代で約一ヶ月間抱卵するのですが、親鳥が巣に出入りするのには夜で、巣も岩の隙間や穴の中にあり、生息確認が

日本近海でのみ繁殖する希少な海鳥カンムリウミスズメ。



三宅島の沖合約10kmにある大野原島。カンムリウミスズメが繁殖する。

やまもと ゆたか
山本 裕

1964年山口県生まれ。日本野鳥の会自然保護室所属。三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館の3代目チーフレンジャーを経て、2008年より自然保護グループチーフ。海鳥をはじめ、島の鳥たちには強い思い入れがある。カンムリウミスズメの保護活動やマリンIBA(海の重要野鳥生息地)の選定に携わっている。

こばやし ゆたか
小林 豊

1960年北海道生まれ。日本野鳥の会会員室所属。学生のころに男女群島、草垣群島などで野鳥の調査を行った経験を持つ。三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館開設時の初代チーフレンジャーであり、カンムリウミスズメ保護の始動に携わった。サンクチュアリ室、自然保護室を経て、2003年より会員室室長。



簡単にはできません。さらに繁殖期以外は洋上で暮らしているため、伊豆諸島で生まれた鳥がどこへ行き、いつ頃また戻ってくるのか、いまだに解明されていません。伊豆諸島では、昔はもつと多くの島で繁殖していたらしいのですが、当時のデータはほとんどなく、いつごろから少なくなってきたのかも不明です。

カンムリウミスズメのほかにも、生息数の変化や生態がほとんどわかってない海鳥はまだ何種類もあります。今後の調査研究によって、生物多様性保全における島の重要性はますます高まってくるでしょう。

まとめ

鳥の生物はとても貴重ですが、その生息環境は限られたものです。そのため、生息環境が悪化した場合、移動性に

(註)

註1 生物多様性ホットスポット：国際的なNGO組織「コンサベーション・インターナショナル」が二〇〇五年に三四ヶ所のホットスポットを選定。地球的規模での生物多様性が高いにも関わらず、消失の危機に瀕している地域のこと。

註2 IBA (Important Bird Areas, 重要野鳥生息地)：世界的な鳥類保護団体「バードライフ・インターナショナル」と各国のパートナー団体（日本では日本野鳥の会）が、世界共通の基準を用いて、野鳥の重要な生息地をリストアップし、保全を促している。

乏しい島にすむ生物は絶滅のリスクが高くなると考えられます。一度失ってしまったと二度と取り戻すことはできません。島の持つ固有性はかけがえのない島の宝物であると同時に、特色ある重要な資源でもあります。

日本野鳥の会でも、伊豆諸島の三宅島を中心に、島の希少な鳥類の保護を通じてその島や周辺海域の環境を保全する活動に取り組んでいます。とくにカンムリウミスズメは海洋環境保全のシンボルとして、創立七五周年の二〇〇九年から重点的に取り組んでいるところです。

島にすむ生物が人とともに共存していくにはその環境を保全しながら活用していくことが大切です。そのためにはまず、その魅力と価値を知っていたくことが、その一歩となることでしょう。島の野鳥と自然を、ぜひ一度見直してみてください。